

〈研究ノート〉

1953年と1954年の在日朝鮮人美術家の活動 —— 機関誌『朝鮮美術』第一号及び第三号の解題

白 凜 (大阪経済法科大学
アジア太平洋研究センター)

はじめに

本稿では、在日朝鮮人美術家の初めての本格的美術団体である「在日朝鮮美術会」の機関誌『朝鮮美術』のうち第一号（1953年11月1日発行）及び第三号（1954年3月20日発行）を紹介する（なお第二号は存在が確認できていない）。この二点について、筆者のこれまでの研究成果を踏まえた説明を付け、「解題」の形で公開する。

本稿で第一号と第三号を扱う理由は、在日朝鮮美術会の創設期の史料であるため、結成の背景や活動の目的、集まった人物、同時代の他の組織との関係などの解明が可能だからである。

本稿の目的は次の二点である。第一に、在日朝鮮美術会が結成当初にどのような組織の傘下団体だったのか、どのような美術団体と関係を持っていたのかを解明する。第二に、この会に参加していた美術家たちの政治、生活、文化の関心事を明らかにする。

本稿に出てくる在日朝鮮美術会とは、53年結成の在日朝鮮人の美術家たちの組織である。会則をたて、機関誌を発行し、不定期ではあるが総会も開催していた。

両機関誌の発行時期について触れておく。第二次世界大戦終結後、朝鮮半島は東西冷戦の影響を強く受けた。48年には半島の南北にそれぞれ別の政治体制、すなわち南に大韓民国（「韓国」）、北に朝鮮民主主義人民共和国（「共和国」）が成立した。日本に住む朝鮮人社会にこの分断の影響は大きかった。まず朝鮮半島での独立国家を支援する在日朝鮮人連盟（45－49年。以下「朝連」とする）が結成されたが、共産主義の介入に反対する在日本朝鮮居留民団（46年

－。現在の在日本大韓国民団。「民団」）が別に結成された。48年の分断以降は、それぞれ共和国支持と韓国支持を表明し対立した。朝鮮戦争（50－53年）が始まる前夜からは朝連への日本当局の弾圧は特にひどく、49年に解散させられた。また51年には在日朝鮮人の日本国籍は日本当局により強制的に剥奪されることになる。同年51年、朝連を引き継ぐ形で在日朝鮮統一民主戦線（以下、「民戦」とする）を結成した。民戦は、現在まで続いている在日本朝鮮人総联合会（55年－）の母体であり、後述するが、日本共産党との関わりを強く持っていた。本稿であげる二つの機関誌は、在日朝鮮人自身のルーツである朝鮮半島と、居留地である日本とのほごまで、運動と生活が様々な動きを見せていた時期に作成されたものである。

これまで在日朝鮮人の美術史研究では、史料の欠損を理由に50年代の検証が手薄になってきた。そのため当該美術家の活動自体が無かったものとさえ思われている。しかし実際には、在日朝鮮人美術家たちのこの時期の活動は見過ごすことができない。上記の本稿の目的を達成することで、当時の在日朝鮮人美術家たちが実際に存在し、孤独にただ黙々と美術作品を描いていたのではなく、美術を愛する朝鮮人同士の紐帯を求めて団結し、周囲とのかかわりを持ちながら「朝鮮人として」、また「美術家として」いかに生き、描くべきかを模索していたことが明らかになるだろう。朝鮮戦争終結直後、在日朝鮮人美術家たちは誰と接点を持ち、何を求め、何を思っていたのだろうか。ここで扱う二つの史料は、本稿で初めて世に公開するものである。第二次世界大戦後の日本美術史研究及び朝鮮半島の美術史研究と比較検討できる素材とな

れば幸いである。

本稿の構成は次の通りである。次節「1」では第一号の、続く「2」では第三号の解題を記述する。それぞれの機関誌の基本情報を整理した後、内容の特徴を整理する。整理にあたっては、すべての記事の見出しについてこれに番号をつけながら提示し、字数制限上簡潔ではあるが記事の「概説」を記す。なお、約350字を超える比較的長文の記事については「要約」を付ける。短文の記事については記事をそのまま「引用」する。このような方法で二つの機関誌の記事内容の特徴をそれぞれ整理したあと、両者を比較精査し、関心事と組織の立場や方向性の解明を試みる。最後に「おわりに」で本稿の内容をまとめる。

※凡例

- ・史料の日本語訳は筆者による。
- ・字がつぶれているか、紙の破損により読み取れない文字は「△」で表した。
- ・原文を生かしながらも、適宜現代語に変換するか、表現をわかりやすくした箇所もある。

1、新組織誕生の記録 ——機関誌第一号解題

1-1 基本情報

史料から読み取れる限りの基本情報は以下の通りである。

タイトル：『朝鮮美術』

No.1 在日朝鮮美術会機関誌

発行年：1953年11月1日

記載住所：東京都港区芝新橋7-12

寸法：B5×四面

印刷方法：ガリ版刷り

使用言語：ハングル（漢字混じり）

1-2 記事見出しと概説及び要約

【一面】

①在日朝鮮美術家総結集!! 10月4日 全国総会（約850字）

（概説）在日朝鮮美術会結成までの過程と結成大会の様子

（要約）在日朝鮮人の美術運動は沈滞状態にあっ

たが、9月初旬に総会開催を決意し、計五回の準備会を経て、10月4日に総会を開いた。東京や大阪、岐阜、神奈川など各地から美術家30名ほどが産別会館に集まった。11時に開会宣言。議長選出、祝辞や他団体からのメッセージの朗読、一般報告ののち、討論に入った。討論では祖国にルネッサンスをもたらすという大きな抱負などが語られ、新役員の選出を発表、祖国の美術家同盟に送るメッセージを採択した。

【二面】

②祖国復興事業に美術家も参加（約160字）

（概説）10月9日に美術会事務所にて第一回常任委員会が開催された。決定事項は（1）から（8）までであり、詳細は下記の通りである。原文からそのまま引用する。なお、ここに出てくる「文芸総」とは「在日朝鮮文学芸術家総会」の略称（1952年結成）である。傘下団体に、在日朝鮮美術会のほか、在日朝鮮映画人集団、在日朝鮮文学会などの傘下団体があった。機関誌『文化戦線』を刊行していた（第一号は1953年9月30日発行）。

（引用）

（1）会員たちは自主的に祖国復興事業に参加すること、（2）機関誌刊行の件（ㄱ）名称「朝鮮美術」（ㄴ）発行「毎月一回」（ㄷ）用語「国語」（ㄹ）編集委員「五名」、（3）合評会を兼ねて毎月第一日曜日に月例会を持つこと、（4）会員作品頒布の件（ㄱ）油画一号千円（ㄴ）文芸総と美術会運営資金として代金の二割を収めること（ㄷ）作品は事務局及び常任委員会の責任のもと審査する、（5）同胞を対象にした鑑賞会を開催すること、（6）各美術館に交渉して廉価入場券を譲ってもらうこと、（7）病気の会員を見舞うこと、（8）研究部を設置すること

③創刊を祝福して 文芸総書記長 朴元俊（約350字）

（概説）創刊に際し送られてきた文章が紹介されている。筆者の朴元俊は作家である（1917-1972）。また文章に出てくる「反米・反吉田・反李承晩・反再軍備」は当時の日本共産党の運動方針にある「反米・反吉田・反再軍備」の「三反闘争方針」に「反李承晩」が加わったもので

ある。

(要約) 美術会の結成により美術家の活動が発展したことを指摘し、今後の課題については、敬愛する金日成元帥の求める芸術を実現することを訴えている。また当面は反米・反吉田・反李承晩・反再軍備の戦いに力を発揮することを期待すると書かれてある。

④祝 朝鮮美術 創刊(約80字)

(概説) 同会に対する賛同団体の名称及び個人名が書かれてある。以下引用する。

(引用)

民戦中央委員会、民戦東京委員会、女同中央委員会、解救中央委員会、民愛青中央委員会、顧問강철・金成泰・申鴻湜・洪寛千、在日朝鮮文芸総、朝鮮演劇研究所、朝鮮民族舞踊団、朝鮮音楽家集団、朝鮮映画人集団、在日朝鮮文学会

【三面】

⑤文芸総定期総会 画期的な成果!! (約380字)

(概説) 1953年10月11日～12日に開催された文芸総定期総会の様子。

(要約) 40余名中、美術会会員は8名。新たな運動方針を採択し、60万同胞に対する奉仕においてのみ金日成元帥が呼びかけた民族的、英雄的、世界的作品を描く道であることを再確認した。

⑥創刊のことば 会長 李寅斗(約440字)

(概説) 在日朝鮮人美術家をとりまく情勢や彼らに求められていることが述べられている。会長の李寅斗は、東京美術学校(現:東京藝術大学)に在籍していたことや、デッサン力のある美術家だったことは伝えられているが生歿など詳細は不明である。

(要約) 祖国から勝利と復興の声が聞こえてくる。在日朝鮮人60万人の同胞は平和的統一と独立のために反米・反李承晩・反吉田・反再軍備闘争を繰り広げる時、在日朝鮮人美術家たちは全国総会を開催した。我々美術家に対する助言をお願いしたいという内容が書かれてある。

⑦民戦四全大会 代議員派遣! (約140字)

(概説) 民戦第四次全体大会に在日朝鮮人美術会会長が参加した様子

(要約) 1953年11月11日から13日までに大阪で開かれる予定の民戦四全大会に、文芸総から7名の代議員割当をえた。我が美術会からは会長李寅斗氏が、去る18日の「月例会」にて代表として推薦された。この機会を利用して関西支部との緊密な連絡を取り合うために呉林俊常任も同行予定である。

⑧消息(約300字)

(概説) 会員の活動について9項目が列挙されている。以下引用する。

(引用)

一、作品頒布会 金昌洛氏「風景画」一点、同和信用組合に買入。代金の5%を祖国復興事業募金にカンパした

一、十月二日民戦四全大会ポスター合作完成

一、十月十九日東京芝公会堂にて祖国映画「郷土を守る人たち」が上演。観覧した会員たちに表現できないほどの感激を与えた

一、十月二十三日美術会の最近の活動報告書を大阪、京都、名古屋支部へ発送した

一、朴史林氏は一般大衆及び高等学校を対象にした美術読本を執筆中

一、金昌洛、安春植、盧忠鉉氏たちは学同文化祭舞台装置を担当している

一、李寅斗、呉炳学両氏は、「師範大学校」美術講師として△

一、十一月二、三日 東京△第五次大会に会長及び六名が参加した

一、呉林俊氏は解放新聞の連載小説の挿絵を担当することになった。

一、十月二十九日付解放新聞に「共同制作におけるいくつかの教訓」を発表

【四面】

⑨李ライン問題 日本美術会事務局にて検討!(約380字)

(概説) 日本美術会は1946年に結成された日本の美術団体である(機関誌に『美術運動』がある)。この記事には1953年10月15日に同美術会事務局で開催された懇談会の様子が書かれてある。以下に出てくる「日本アンデパンダン展」は日本美術会主催の展覧会であり、1947年に第一回展が開催された。

(要約) 1953年10月15日、日本美術会事務局にて朝

日美術懇談会運営に関する両事務局協議会を開催。取り決めの詳細は以下の通りである。

(引用)

- ・両美術会は両民族の代表として、協力するという原則にたち、「日美」会員である本会会員たちは「日美」を脱会する
- ・「日美」アンデパンダン展には朝鮮美術会として団体参加する
- ・李ライン問題は日本人自体の問題として日美事務局は中央常任委員会にかけて速やかに声明書を発表する
- ・横須賀基地 合同写生会及び展示計画
- ・「原爆図」平和賞受賞記念計画

⑩月例会 盛大!! (約310字)

(概説) 1953年10月18日に開催された月例会の様子。

(要約) 二人の新会員（金漢道ともう一人は不明）を迎え、文芸総事務局長朴元俊氏を迎えて総会を開いた。同胞事業に積極的に参加すること、同時に民戦四全大会代議員及び祖国派遣代表として会長を推薦し、祖国復興事業のポスターを急いで制作することを決めた後、同窓会を開いた。

⑪通信 (約120字)

(概説) 大阪の会員である辺時志からの通信が紹介されている。10月29日に開催した臨時総会について書かれてある。著者の辺時志（1926－2013）は1950年代末に大韓民国に帰郷し、制作の他大学教員としても活躍した。

⑫お願い (約150字)

(概説) ここでは4項目が列挙されている。

(引用)

- 一、まだ住所を事務局に提出していない会員は、速やかに通知してください
- 一、会費は必ず十五日までに事務局に送ってください
- 一、「月例会」その他集合には全員参加を期待します。出席できない会員は葉書で事務局に連絡してください
- 一、李仁洙氏の住所をご存知のかたはすぐに事務局にご連絡ください

1-3 内容の特徴

以上のように足早ではあるが機関誌第一号に目を通すと、沈滞状態から抜け出そうとする意欲と、初めての本格的な美術団体を設立した美術家らの並々ならぬ熱意が込められている。会員の個人名（李寅斗、金昌徳、辺時志、全和光、呉炳学など）が挙げられている点もこの史料の価値を高めている。

特徴は次の二点である。第一に、関連団体として、「文芸総」、「民戦」、「日本美術会」の名称があがっており、新組織である在日朝鮮美術会がこれらとかかわっていた。具体的には同会が民戦の傘下団体であり、かつ文芸総の傘下団体であることがはっきり明示されている（「見出し④」参照）。民戦の傘下団体には「女同（在日朝鮮民主女性同盟）中央委員会」や「解救（在日朝鮮解放救援会）中央委員会」などがあったことも伺える。文芸総の傘下団体としては美術家の団体のほか文学、演劇、舞踊、音楽、映画など各団体もあった。

さらに、民戦が日本共産党と緊密な関係にあったことは本史料からも、また当時の他の資料からもうかがえることであるが、本機関誌からは特に、在日朝鮮美術会が日本の美術団体である日本美術会と緊密な関係を持っていたことが確認できた。日本美術会は上記の通り1946年に結成された美術家の団体であり、その創設時、綱領に、民主的美術文化の創造と普及、美術を民衆に解放すること、美術に関する封建性と因襲を排除することなどを掲げていた。このような同会の活動の方針に、在日朝鮮人美術家が共感を覚えていた。在日朝鮮人の日本アンデパンダン展への出品は同機関誌発行の前年である1952年（第五回展）から始まっていたが、本史料によると、在日朝鮮人美術会の設立以降は、美術家の個人的な出品ではなく、在日朝鮮美術会の団体出品へと切り替えていることもわかる。

第二に、在日朝鮮人美術会の会員の関心事が、祖国すなわち朝鮮民主主義人民共和国及び文芸総の運動方針や活動の方向性と関連性があったことも伺える。「見出し①」、「見出し③」、「見出し⑤」、「見出し⑥」には祖国にルネッサンスを到来させる意気込みや、金日成元帥の求める芸術を実現させるための制作、反米・反吉田・反李承晩・反再軍備の運動に、美術家たち

が積極的にかかわることが求められていることも明言されている。

2、活動の具体化——機関誌第三号解題

2-1 基本情報

まず、第一号同様、史料から読み取れる限りの基本情報を記す。

タイトル：『朝鮮美術』No.3
 在日朝鮮美術会機関誌
 発行年：1954年3月20日
 価格：一部 10円
 記載住所：東京都港区芝新橋7-12
 寸法：B5×四面
 印刷方法：ガリ版刷り
 使用言語：ハングル（漢字混じり）

2-2 記事見出しと概説及び要約

先の第一号の解題同様、見出しに番号を付け、「概要」を記す。必要に応じて「要約」を付け、適宜原文から「引用」する。

【一面】

第一面には、一枚の紙が糊で張り付けられている。この紙には版画作品が中央に刷られており、上部に資料タイトルである『朝鮮美術』がハングルで書かれ、住所と発行ナンバー、そして価格が明記されている。版画は木版画で、朴史林が作者である。画面右に体の大きな二人の男性がおり、女性を強制的に抱えて奇妙な笑みを浮かべている。画面左には遠景に海と山と空が、近景にはいたたまれない表情を見せる人々が小さく刻まれている。上記の通り、この版画作品及び資料タイトルなどが書かれた紙は、第一面に糊付けされているのであるが、裏側の上辺数cmのみに糊が塗られている状態で、これをめくると第一面に以下の情報が記されている。

（引用）

洋鬼 朴史林 刻
 こいつらは／どこにいても／悪鬼のような／
 行為を／しつくしておいて／‘神様’と
 道徳を／ことのほか探す

【二面】

二面からは第一号同様、見出しと記事文章が掲載されている。

①文化戦線 一步前進！ 着々と準備が進む文団連 近々文化会館も着手（約870字）

（概説）日本の文化環境の現況、在日朝鮮人の文化環境の現況、在日朝鮮人美術家の活動、文化会館の建設について。

（要約）日米反動勢力の文化政策は、日本の再軍備を促進するためのものである。民主的な美術運動を破壊し、生活権と創作権を剥奪しようとしている。また朝鮮人たちの文化政策を戦争政策の道具に利用しようとしている。在日朝鮮人たちは、民戦14中央委員会で文化戦線の強化拡大を強調した。現在、文団連を組織しようとしており、これを成功させたい。同時に、文化会館の建設も勧めなければならない。在日朝鮮美術会が制作した「完成外観図」を文芸総事務所に掲示した。これと並行して4月の小品展も成功させよう。

②20世紀の野蛮人 米日反動教育弾圧に憤激する文芸総（約360字）

（概説）日本政府の朝鮮学校弾圧に関する美術会の対応について。文章に出てくる「教育二法案」とは1954年に公布されたもので、これにより教育における「中立」が要求された。また「七項目条件」とは「授業や校内の掲示、卒業式や運動会も日本語でやる」他、六項目からなり東京都教育委員会が朝鮮学校（当時は都立であった。1955年に私立に移行した）に押し付けてきたものである。

（要約）教育二法案を出し、民族教育を破壊しようとしている日本政府が、七項目条件を朝鮮学校に強要している。これは我々の生活と人権の問題である。文芸総申鴻湜会長を委員長に選出し、民族教育文化防衛対策委員会が組織された。美術会からは会長李寅斗が参加している。日本文化人に対する呼びかけ文と個人訪問署名、東京都教育委員会に抗議などの運動を展開している。文京小学校に美術会から舞台装置を援助し、先生が不在の学芸会を成功させ、学父兄たちに感動を与えた。

③成長する朝中 サークル（約500字）

（概説）東京朝中にある漫画サークルについて。
（要約）漫画サークルが機関誌「漫画」を発行した。その創刊号には会員の情熱と努力が表れている。このサークルを指導している朴と全が、漫画の重要性を認識しており任務を実践遂行している証拠である。引き続き成長し、内容的にも技術的にも一層充実することを期待する。

【三面】

④平和と自由のために国民美術の創造 展覧会 日本アンデパンダン展 日本美術会主催（約720字）

（概説）第七回日本アンデパンダン展の展評。「日本アンデパンダン展」については第一号「見出し⑨」で説明した通りである。
（要約）第七回の特徴は、職場労働者たちが現場のスケッチを始めたことや、内灘、赤羽、立川などの各基地反対闘争を表現したテーマ制作があったこと、また、版画、漫画、ポスター、写真など、各種形式の作品が幅広い作家と大衆と密接に結束している点である。今回の展覧会は、梁氏の彫刻を始め、南、張、曹などの諸氏が出品し、美術戦線で日朝親善が図られている。特に評価すべき点は、神戸朝鮮中学の学生たちの集団制作の「版画群」である。金元帥、馬首相、毛首席、胡大統領の偉大な指導者、愛国者の姿、学生の生活状態などを表現した木版画が展示された。曹良奎の「労働者の休息」他二点は反省すべき点がある。

⑤日本美術会大会 朝鮮美術会参加（約400字）

（概説）1954年3月3日、日本美術会大会が上野都美術館で開催され、ここに在日朝鮮美術会会長と事務局が参加。
（要約）日本美術会は新中国の研究を始めた。レーピン、ドーミエなどの「スライド」活動、移動展活動、機関誌活動、その他サークル活動等、様々な面で研究と実践活動を重ねた。在日朝鮮美術会からの参加者は、祖国美同からのメッセージを朗読、伝達した。美術会からは返事を送るという返答をいただいた。今後日朝親善により一層の努力を相互確約して盛大な大会の幕を下ろした。

⑥消息（約500字）

（概説）会員の消息について以下の7項目が列挙されている。

（引用）

- ・機関誌「朝鮮美術」第二号は六〇部売却、各地方支部に百三十部、中央に五十部、その他を合計して、総二百五十部を配布した。
- ・祖国から来た手紙—日本人に対するもの—を日本美術会、日本版画運動協会、須田国太郎氏に各発送した。
- ・「朝鮮評論」の「カット」を李寅斗、リ・チャンガン、オ・リョング、リ・ヨソウ、ピョセジョン、ホ・ファン、李讃康、呉竜丘、李榮雨、表世鐘、許燠六人が合同制作した。
- ・全和光（京都）から会員たちに挨拶を告げるという手紙と新会員が五、六人いるという。
- ・文京小学校の文化祭の舞台装置を、李讃康、許燠の二名が夜を徹して完成させた。
- ・大阪支部から機関誌「人民美術」第二号発刊準備中である。また週一回郊外スケッチ会を開催して月例会は毎月第一土曜日に举行している。辺志時君は、今回の「芸術のリアリズム」と支部発行の「新美術」を完成させたとのことである。神戸の同胞に四月四日までに連絡を取るとのことである。
- ・今回の日本アンデパンダン展に版画群を出品した神戸朝中の美術担当の先生は、今後本会と連絡を頻繁に取り合うという知らせを受けた。

⑦朝鮮料理 100円均一 紅桃園 文化人のオアシス 池袋・西口・常磐通りふみきり側

【四面】

⑧世界美術の動き（約870字）

（概説）四面の全面に渡って、ソ連、フランスおよび中国の美術情勢が書かれてある。紙面中央に版画が挿入されている。画面下に金管楽器を吹いている人物（おそらくアイゼンハワー）がおり、「ラングーン アジア社会党大会」と書かれた看板を持っている（「アジア社会党大会」とは1953年1月に現在のヤンゴンで開かれた国際大会のこと）。その金管楽器のベルから、もう一人の人物（イギリスのアトリーと思われる）が顔を出し、「アメリカの援助が必要である」と懸命に叫んでいる。この版画の下に以下のような文

章がある。

(引用)

祖国の漫画活動は、漫画雑誌「ファサル」一矢一が数万部出版されることからわかるように、政活漫画、ポスターの両面で活躍している。アン・ギョン安均氏を始め、パク・スンフィ朴承喜、アン・ギョ安圭、チェン・リョングァン張玲光、チェン・チョル張徹などが活躍している。

(要約) ソ連について。ゴヤ、ドーミエ、カサルキン、トバシリエボの作品が注目されており、レーニングラード、キエフ、タシュケント、△、その他各都市で最近の中国美術家たちの作品展が開催されている。フランスについて。フーシュロン、△、アブタールなど若い芸術家が美術グループを組織している。抽象絵画が多くみられたが、リアリズムの方向が多くなっている。中国について。月刊機関誌「美術」の創刊号が△月20日発行。美術における創作研究批判等の活動を推進させることが目的。

2-3 内容の特徴

第一号との共通点は、次の二点である。第一に、民戦の傘下団体としての活動であることが明示されている。特に三号では、「見出し①」に見られるように文化会館の建設が特記されており、これは文芸総の機関誌にも取り上げられていることから、当時の文化活動としては画期的なことだったと考えられる。第二の共通点は、日本美術会との活動が強調されている点である。第一号では「見出し④」及び「見出し⑤」で日本美術会との活動について触れられている。

一方、同号の特徴は以下の三点である。第一に、本文とは別に表紙が付いている点をあげることができる。表紙があるというだけでなく、これが版画であり、四面の世界の美術情勢を紹介している箇所でも、版画作品が中央に配置されていることは注目に値する。1930年代以降、中国の文学者・魯迅（1881-1936）から始まる版画運動は、のちにアジア全域に広がり、第二次世界大戦終結後の日本においては、北関東を皮切りに拡散した。当時在日朝鮮人の美術運動において版画が重要な役割を果たしており、また朝鮮人美術家たちが日本版画運動協会（1948年結成）とも接点があったことは、本史料の「見出し⑥」の二項目目に同協会の名称が挙がって

いるところからも、また当時の新聞からもうかがえる。

第二に、在日朝鮮人の教育について言及されている。「見出し②」にあるように、日本政府の朝鮮学校弾圧について抗議する文章があるほか、「見出し③」に朝鮮学校のサークルが紹介されている。「見出し④」は日本アンデパンダン展の展評であるが、そのなかにも朝鮮学校の学生の作品についての言及がある。また「見出し⑥」の6項目に朝鮮学校での美術家の活動が紹介されている。教育が話題にあがるのは、東京都立朝鮮人学校の存続が議論されていたことや、朝鮮人美術家たちが朝鮮学校の美術の授業を担当していたことが背景にある。

第三に、美術の世界情勢が書かれている。四面（「見出し⑧」）に特集が組まれてあるほか、「見出し⑤」の日本美術会の研究活動を紹介する記事の中でも、ソ連や中国の美術活動について触れられている。ソ連ではスペインの画家・ゴヤ（1746-1828）やフランスの画家・ドーミエ（1808-1879）らが注目されていること、また中国の美術家たちも紹介されていることが書かれてある。これに並んでフランスでは画家・フーシュロン（1913-1998）が活躍していること、中国では月刊雑誌『美術』が発刊され、創作と研究の推進が見られると書かれてある。

おわりに

本稿では『朝鮮美術』第一号と第三号に解題を付けた。同誌を発行した在日朝鮮美術会は、第二次世界大戦終結と植民地からの解放、そして祖国の分断を経て、朝鮮戦争停戦直後に、在日朝鮮人美術家が立ち上げた美術団体であった。民団と朝連（のちに民戦）の対立、民族教育に対する日本当局の暴挙が吹き荒れる中、在日朝鮮美術会に属した美術家たちは、その創設期にあって向かうべき方向を模索していたことを本稿で確認した。

第一号には在日朝鮮美術会結成の意気込みが綴られていることを確認し、在日朝鮮人の民族団体との関連性や、日本の美術団体とのかかわりを明らかにした。そのうえで、大衆のための作品を制作することが、同会の当面の目標であったことを確認した。同号は1953年の新組織設

立前までの模索状態を脱し、運動と制作の中心軸を求める美術家たちの情熱の反映だった。

第三号には、第一号同様、民族団体や日本美術会とのかかわりが書かれていた。これに加え、日本版画運動協会との接点も確認した。また朝鮮学校の民族教育への関心が高かったこと、ソ連や中国、フランスをはじめとする世界の美術情勢にも目を向けていたことをも確認できた。三号には、手探りながらも、在日朝鮮美術会の活動の方向性の確立を求めていることが記録されている。

本稿で確認した通り、在日朝鮮美術会に属した美術家らは同じ境遇の在日朝鮮人に紐帯を求めて共に組織を立ち上げ、中国に始まる版画運動やアジア社会党大会に関心を寄せながら、列強からの解放を目指したアジア諸国との連帯意識を持っていた。また、戦争の惨状や、社会の底辺を生きる人々を描き、社会の不条理を辛辣に描写した版画作品も残したゴヤやドーミエ、社会問題を絵画の主題に風刺の効いた絵画を残したフーシュロンに関心を寄せており、高尚な芸術ではなく大衆的な美術作品の制作を目指していた。

今後の課題は、今回の解題を踏まえたうえで、入手できている五号（1956年3月発行）、六号（1959年1月発行）、七号（1961年5月発行）にも解題を付けて公開することである。朝鮮半島の情勢と文化政策、日本の美術運動に対する同会の会員たちの見解と、彼らの活動や表現の理論的根拠と、その変遷が明らかになるだろう。また、1950年代の日本のサークル運動と版画教育の歴史研究を参考に、在日朝鮮人のサークル運動と民族教育を精査することである。第三号には日本の著名な美術家・須田国男の名もあがっており、『朝鮮美術』の解題が戦後日本美術の研究発展に貢献するであろうことを見越しながら、研究を進めていきたい。